

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Characteristics of "Word List by Semantic Principles"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏野, 和佳子, KASHINO, Wakako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002158

『分類語彙表』の特徴と位置付け

柏野 和佳子

(国立国語研究所)

キーワード

分類語彙表, シソーラス, 類語辞典, 意味分類, 意味体系

要 旨

本論では、他のシソーラスや類語辞典と比較しながら、国立国語研究所『分類語彙表』の特徴と位置付けとを明らかにする。現代日本語の最初のシソーラスである『分類語彙表』（初版 1964年、増補改訂版 2004年）の最大の特徴は、語彙の分布や偏りを見ることを一番の目的にしている点である。そのために、分類体系は品詞による4分類からはじめられ、4～5階層の単純な木構造になっている。また、語が本来もつ性質によって分類することを優先する「属性分類」が行われている。一方、多くのシソーラスや類語辞典は、適切な言葉の検索に便利であることを一番の目的にしており、ある主題のもとに関連する語を集めて分類することを優先する「主題分類」が多く行われている。

1. はじめに

一般の国語辞典では語句がアイウエオ順に掲載されている。そのため、複数の国語辞典を見比べた場合、見出し語の収録に差異はあっても、語句の並びに差は感じられない。一方、シソーラスや類語辞典と呼ばれるものの多くは語句が意味によって分類・配列されている。そのため、見出し語の収録の差以上に、分類・配列の違いによって、語句の並びに大きな違いがあるという印象を受けるものである。

近年、様々なシソーラスや類語辞典が続々刊行されている中、『分類語彙表』（初版 1964年）は2004年に増補改訂版が公刊された。本論では、まず『分類語彙表』の語彙分類体系の特徴を明らかにし、次いで、他のシソーラスや類語辞典と比較しながら、『分類語彙表』の位置付けについて考察する。

2. 『分類語彙表』の特徴

2.1. 『分類語彙表』とは

『分類語彙表』は1964年に国立国語研究所資料集第6として公刊された、現代日本語を対象とした最初のシソーラスである。1999年までに31版を重ねる一方、1981年より増補改訂作業がはじまった。1996年3月のモニター用公開（中野 1996a, 1996b）を経て、2004年1月には現在の『分類語彙表』の増補改訂版が刊行され、同時に電子化データベースも公開された（山崎 2004）¹。

『分類語彙表』とは何か、初版の「まえがき」には次のように述べられている。

ここに分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。

そして、『分類語彙表』は主に次の二つの役割を担うものであることが述べられている。

- ① 言葉や概念を手がかりに、適切な言葉を見つけるもの
- ② 語彙の分布や偏りを見るための「物差し」となるもの

その結果、『分類語彙表』は、表現辞典として、また、言語の研究資料として数多く利用されてきている（宮島・小沼1994；中野1995）。例えば、宮島・小沼(1994)には『分類語彙表』を言語研究に利用した論文136例（1965年～1994年）が取り上げられている（表1）。電子化されたFD版（国立国語研究所編 1994）が市販された後は、工学的な言語処理研究における利用も一気に広がった。近年は医学や建築学での利用もあり、『分類語彙表』の研究利用のすそのはさらに広がっている。

表1 『分類語彙表』を用いた言語研究の論文の内訳（宮島・小沼(1994)による）

(件)

分類	論文数
1. 語彙体系	21
2. 作品の用語調査	41
3. 文法（文中の単語結合や、合成語における要素結合の意味構造など）	22
4. 方言	3
5. 日本語史	5
6. 教育・発達	11
7. 言語情報処理（語と語の類似度の計算など）	7
8. 類語群	14
9. 意味分類	12
合計	136

2.2. 収録語

『分類語彙表』初版の延べ語数は、FD版によれば36,780語である。語数がそれほど多くないのは、語は意味体系の例示のためにあげる、という方針があったためである。特に、表2に示すような特徴があった。

表2 初版の収録語の特徴

- ① サ変動詞のうち、1字漢語に「する」がついた「愛する」「信ずる」の類は収録していたが、2字以上の漢語に「する」がついた「愛好する」「信用する」などは収録せず、「する」なしの漢語のみ収録していた。
- ② 基本語の多くは多義的であるが、代表的な語義に限定して収録していた。
- ③ 類推が自明なものは収録していなかった。例えば、〈真北，真西〉はあったが、〈真南，真東〉はなかった。
- ④ 短い単位で収録することが多く、複合語や慣用句はあまり収録していなかった。

しかしながら、これらのことは、表現辞典としても言語の研究資料としても、『分類語彙表』の使い勝手を悪くしていたところがある。そこで、表2に示した4点を補う増補改訂作業が行われ、新語なども加えられ、現代の日常社会で普通に用いられる語を中心に数多く増補された。その結果、現在の増補改訂版の収録語数は、延べで95,811語、異なりで79,516語である。この数は、一般の小型国語辞典に相当する数である。なお、初版も増補改訂版も収録語の選定に際しては、国立国語研究所がそれまでに、雑誌、新聞、教科書、テレビを対象に行った各語彙調査結果（国立国語研究所 1953, 1957, 1962, 1970, 1983, 1986, 1987, 1995）を参照している。各語彙調査において使用率の高かった一般的な語は、ほぼ網羅的に収録されている。

2.3. 分類体系

2.3.1. 分類の特徴

『分類語彙表』（以下、特に断らない限り、増補改訂版を指すものとする）の分類体系は固定された階層構造になっており、各語の体系的な位置付けは分類番号によって示されている。木の形は明示されていないが、その体系は木構造であるといえる。図1に例を示して説明する。

分類の各項目、例えば〈話・談話〉には〈1.3131〉のように、〈類〉を整数位に置いて小数点以下4けたの「分類番号」が付されている。この数字が全体の中に占める個々の分類項目の位置付けを示している。分類番号によって表される意味の範疇は、より広い概念から順に、〈類〉〈部門〉〈中項目〉〈分類項目〉となっている。つまり、分類項目は4階層になっており、各語はこの4階層目の分類項目の下に分類されている。その例を図2に示す。以下、1階層目から4階層目までの意味範疇と、さらに4階層目以下にある細分類について説明する。

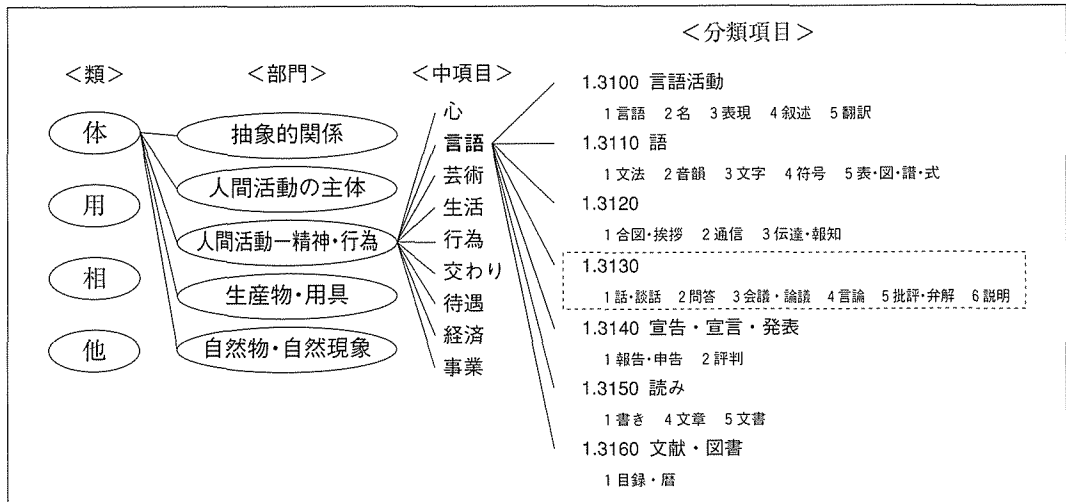


図1 分類項目＜1.3131 話・談話＞の位置

01	話(はなし) 談話 談 やり取り 三者面談 話し掛け 語り掛け	話(わ) 会話 対話 対語(たいご) ダイアログ 面談	トーク	夜話(よばなし) うわさ話 雑談 無駄話 体験談 思い出話 積みもる話 笑い話 苦勞話 のろけ 猥談 縁談 訓話	夜話(やわ) 井戸端会議 放談 ばか話 駄弁 失敗談 昔語り 土産話 笑話(しょうわ) 自慢話 手柄話 一つ話 むつ言 寝物語 別れ話 手切れ話
02	語らい 欲談 笑談 閑語 高談 直話 立ち話 私語 の話 寸話 長話 下手(へた)の長談義	談論 懇談 談笑 閑話 閑談 高話 直談 車中談 ひそひそ話 打ち明け話 小話 挿話 長舌 長談義			
03					
04					
05	実話 こぼれ話 後日談 裏話 たとえ話	逸話 余話 後日譚 楽屋話 寓話	エピソード 余談 余聞 楽屋落ち 例話	秘話 余聞	
06	哀話 奇談 珍談 美談 情話 サクセスストーリー	悲話 奇話 奇聞 珍聞 清談 佳話 ロマンス	異聞		
07	茶話(ちゃばなし) 茶飲み話	茶話(さわ・ちゃわ)			
08					
09					
10					
11					
12					

図2 分類項目＜1.3131 話・談話＞に分類されている語

2.3.2. 〈類〉：1階層目：品詞論的な4分類

まず、大分類として、品詞論的に4分類されている。この4分類の番号が分類項目の整数位の番号になっている。

1. 体の類…名詞の仲間－《何、何ごと、何もの、どれ、だれ、いつ、どこ、いくつ》等の概念を表す語と、それらを問いとしたときの答えとなるべき語。
2. 用の類…動詞の仲間－《ある》に関するもののほか、《どうする、どうなる》等の答えとなるべき語。
3. 相の類…形容詞の仲間－《ない》に関するもののほか、《どう、どうだ、どんな、どんなに》等の答えとなるべき語。いわゆる形容動詞、連体詞、ある種の副詞を含む。
4. その他の類…その他の仲間－いわゆる接続詞、感動詞、ある種の副詞の類等。概念間の関係付け、叙述間の関係付け、感動、呼びかけ応答、判断・期待・仮定などの叙述態度の予告、待遇表現などを表す語。

しかしながら、品詞分類が優先されると、次のような語は意味的に近くとも離れてしまう。

(1) 名詞とサ変動詞語幹

「変化」〈体の類〉 「変化する」〈用の類〉

(2) 名詞と形容詞・形容動詞語幹

「美」〈体の類〉 「美しい」〈相の類〉

(3) 動詞の派生名詞と動詞

「動き」〈体の類〉 「動く」〈用の類〉

(4) 形容詞・形容動詞の派生名詞と形容詞・形容動詞²

「高さ」〈体の類〉 「高い」〈相の類〉

このような分離に対処するため、大分類以下を細分する際は、なるべく〈体〉〈用〉〈相〉〈その他〉における横の並びが分かるように、細分の番号をある程度一致させることが試みられている。例えば、「光」に関する語は次のとおり分類されている。

- 例： 〈1.5010 光〉 名詞「光、輝き」など
 〈2.5010 光〉 動詞「光る、輝く」など
 〈3.5010 光〉 形容詞や副詞「明るい、くっきり、きらきら」など

つまり、品詞をまたいで関連する意味ごとの語を見比べたい場合は、分類番号がその手がかりになるわけである。

2.3.3. 〈部門〉：2階層目：意味範囲の5部門

大きな意味的まとまりとして、〈抽象的関係〉、〈人間活動の主体〉、〈人間活動－精神および行為〉、〈生産物および用具〉、〈自然物および自然現象〉という五つの部門を設けた。ただし、〈人間活動の主体〉、〈生産物および用具〉は体の類のみである。分類項目の小数点以下1桁目の数字がこの部門を示す。

2.3.4. 〈中項目〉と〈分類項目〉：3・4階層目：意味範囲の5部門の細分類

分類項目の小数点以下1桁目と2桁目を合わせた部分が中項目を示し、3桁目と4桁目を合わせた部分で一つの分類項目を示す。中項目は部門をより具体的に細分したもので、その下位に位置する分類項目をまとめるものである。分類項目は〈体〉〈用〉〈相〉それぞれの類の中にほぼ同様に設け、同様の配列をとった。先に述べたように、三類相互の参照の必要から、原則として三類共通の項目名と項目番号が付けられている。そのため、類によっては番号が欠けている場合がある。また、分類番号は初版の番号を可能な限り引き継いでいるため、必ずしも連続していない。

しかしながら、3桁目と4桁目とが10番台ごとに飛んでいたり、4桁目が「0」であるものがあつたりなかったりと、特徴的な飛び方をしている。実はこれは初版の頃より行われている、さらなる細分類を示すものである。4階層目がある程度大きく、さらに細分類されると考えられるものについて10番台ごとに細分類をした結果であり、その細分類をまとめるような一群が認められればそれが4桁目「0」の位置にすえられていることが多い。例えば、先の図1では、〈1.3100 言語活動〉や〈1.3110 語〉は、細分類をまとめる一群としての分類であることを示し、その4桁目「0」の分類項目が4階層目に、4桁目「1」以上の分類項目が一つ下の5階層目に並ぶ、ということになる。続く〈1.3120〉や〈1.3130〉は、特に細分類をまとめる一群が設けられずに欠番になっており、その結果、4桁目「1」以上の分類項目がそのまま4階層目の位置に並んでいるということになる。

2.3.5. 分類項目以下の細分類

各項目には段落番号が付与されている。そして、一つの段落は場合によって行単位に改行されている。さらに、意味のまとまりの区切りを示すために、複数の段落を区切る「*」が付与されている場合がある。段落番号については、増補版の「まえがき」に「あくまで検索の便宜のためであって、分類自体の小分けを意味するものではない」と断り書きがあるが、分類項目以下に、「*」、段落、行、という最大三つの細分類を示す階層が存在していることになっている。

2.3.6. 項目と語の分類と配列

(1) 項目の配列

基本的には検索の便宜のために、互いに関連する項目は接続して配列されている。また、次の例のように、一般的総括的内容を持つ項目は、部分的な内容を持つ項目より先にあげられてい

る。

例： 身体に関する部分の総記 〈1.5600 身体〉
 身体の各部位に関する記述 〈1.5601 頭・目鼻・顔〉, 〈1.5602 胸・背・腹〉,
 〈1.5603 手足・指〉 … 〈1.5608 卵〉

(2) 項目の見出し

分類項目や中項目の見出しは、それらの内容がなるべくよく表せるように、項目の全体を示すような代表単語のほか、代表的な単語の列挙、説明的な語句などによってつけられている。

例： 代表単語 〈1.2510 家〉
 代表的な単語の列挙 〈1.2650 店・旅館・病院・劇場など〉
 説明的な語句 〈1.2750 国際機構〉

(3) 項目の大きさ

各項目に収載する語の数は限定されていない。よって、項目によって収載されている語の数は異なり、項目の大きさには大小さまざまある。

例： 小さいもの
 〈2.52 天地〉には〈2.5220 天象〉があるのみで、この項目の総語数は13語。
 〈2.14 力〉には〈2.1440 力〉があるのみ。かつこの項目の段落数2は最小。
 大きいもの
 〈1.2340 人物〉の段落数77は最大。

(4) 項目間の概念の重なり

山崎(2004)は項目間に概念の重なりがあることを指摘している。例えば、〈1.1510 動き〉は〈1.1521 移動・発着〉の上位概念に当たるものである。ここで「移動」という語はそれら二つの階層に重複して分類されている。つまり、それは両者の階層間に概念の重なりが生じていることを示している。また、多数の語の重複が生じていることから、階層が離れている項目間にも概念の重なりのあることが確認されている。例えば、〈2.3393 口・鼻・目の動作〉と〈2.5710 生理〉とでは22語が重複し、〈1.1330 性質〉と〈1.3420 人柄〉とでは17語が重複している。このような概念の重なりについては場合によっては見直す必要があると言える。

(5) 語の多重分類

多義語はその意味ごとに分類されている。また、語のもつ意味の異なる部分に着目し、それに応じて分類されている場合がある。以下、それぞれ例をあげる。

例： 【多義】 顔 〈1.5601 頭・目鼻・顔〉, 〈1.3030 表情・態度〉,
〈1.3041 自信・誇り・恥・反省〉, 〈1.3142 評判〉

【着目の差異】 言い直す 〈2.1500 作用・変化〉(「書き直す, 読み直す」と共にあり)
〈2.3071 論理・証明・偽り・誤り・訂正など〉
(「書き直す」と共にあり, 「読み直す」はなし)
〈2.3100 言語活動〉(「書き直す, 読み直す」はなし)

(6) 一項目に収めた語の性質と配列

一つの項目は、同義や類義の関係でまとめられている。対義の関係までまとめて扱った方がわかりやすいと判断されたものは、同一の項目、場合によっては同一の段落に含まれている。なお、初版の「まえがき」で述べられているとおり、自由連想による語群をとらえることは語彙論上意味のあることであると認めつつも、一つの項目が自由連想による語群になることは極力避けられている。以下、初版の「まえがき」よりその説明を引用する。

たとえば〈ビール〉については、飲酒行動に関連して、《酒・スタウト・ウイスキー・飲む・酔う・一杯・あわ・ジョッキ・コップ・ほろにが・ホップ・赤ら顔・ビヤホール》等々が連想されるであろう。しかし、この一群の語は、〈飲む〉や〈コップ〉にとっては必ずしも同等の重要性を持つとは言えない。それにはその連想語群がある。連想語群をとらえることも語彙論上の大切な仕事であると思われるが、ここでは、〈ビール〉をただ《酒・ウイスキー・スタウト》とグループをなすものとして扱い、《飲む》や《ビヤホール》との関係を断ったのである。

配列については、増補版の「まえがき」に「段落および段落内の語の順序は、なるべく意味・用法の広いほうから狭いほうへ配列しているが、必ずしも厳密ではない。」と説明されているとおりである。

2.3.7. 体系のまとめ

以上述べたとおり、『分類語彙表』においてははっきりと分類をうたっている階層は〈類〉〈部門〉〈中項目〉〈分類項目〉の4階層である。しかしながら、形式上階層が認められるものまであげれば、4階層を表す分類項目の下2桁目を10番台ごとに区切る5階層、「*」の6階層、段落の7階層、行の8階層がある。一番深い場合に語はその8階層目に分類される。一番浅い場合では、段落が5階層目にあたり、そこに語が分類される。つまり、語は5～8階層目に分類されていると言える。例えば、先に図1で〈1.3131 話・談話〉は4階層目に位置する分類項目であることを示した。図2に示したとおり、この分類項目には「*」と段落と行とがある。よって、「*」で5階層目、段落で6階層目、行で7階層目になり、各語はその7階層目に分類されていること

になる。

以下、体系全体を示すものとして、分類項目数と語数の内訳を表3と表4とに示す。

表3 <類>と<部門>別の分類項目数の内訳

	体	用	相	その他
抽象的関係	141	77	59	8
人間活動の主体	55			
人間活動—精神・行為	173	148	37	14
生産物・用具	78			
自然物・自然現象	62	24	16	1
計	509	249	112	23

表4 <類>別の収録延べ語数

体	用	相	その他	合計
64,457	21,605	8,879	870	95,811

3. 『分類語彙表』の位置付け

3.1. 主なシソーラス・類語辞典とその特徴

本章では、『分類語彙表』と他のシソーラスや類語辞典間とを比較することによって、『分類語彙表』の位置付けを明らかにすることを試みる。はじめに、『分類語彙表』以外の日本語の主なシソーラス・類語辞典とその特徴について簡単に記述する。

(1) 『角川類語新辞典』(1981)

収録語数：約60,000語

分類の特徴：大分類(10)、中分類(100)、小分類(1,000)、細分類(約3,000)の4階層。品詞の区別なし。大分類は、「自然」「人事」「文化」という枠の中で設けられたもの。

その他特徴：語釈、用例あり。位相が付与されている。

(2) 『日本語語彙体系』(1997)

収録語数：約300,000語

分類の特徴：1階層目が品詞。2～12階層目に2,876個の意味属性を木構造で配置。

その他特徴：さらに6,000語の用言には日英の対訳文型14,000パターンを付す。機械翻訳を主目的にして開発されたため、固有名詞も多く収録されている。

(3) 『類語大辞典』(2002)

収録語数：約79,000語

分類の特徴：カテゴリー(100)，小分類(916)，品詞(11)，小見出しの4階層。カテゴリーは用言に基づいて作成し，人に近いところから遠いところへとという原則にしたがって配置。
その他特徴：語釈，用例あり。位相が付与されている。

(4)『日本語大シソーラス』(2003)

収録語数：延べ約320,000語，異なり約200,000語

分類の特徴：カテゴリー(1,044)，小語群(14,000)，セミコロン(任意)の3段階。品詞の区別なし。カテゴリー部分が先に2～4階層に分類されているため，あわせると一番深い場合で6階層。語釈なし。文法的カテゴリーなどの一部に用例あり。

その他特徴：故事成句，人名やオノマトベが多く収録されている。

(5)『類語例解辞典』新装版(2003)

収録語数：約25,000語

分類の特徴：大分類(10)，中分類(200)，グループ(約6,000)の3段階。助詞・助動詞は別枠で78に下位分類。品詞の区別なし。

その他特徴：語釈，用例のほか，使い分けの解説，対比表などがある。

(6)『三省堂類語新辞典』(2005)

収録語数：約50,000語

分類の特徴：柱(3)，ジャンル(18)，分野，領域の3段階。品詞の区別なし。

その他特徴：語釈，用例のほか，位相，使い分けの解説，図解などがある。また，類語のニュアンスを解説するコラムが86ある。オノマトベも積極的に収録されている。

木村(1993)によれば，このようなシソーラスや類語辞典の編集目的には次の三つがあると言う。

- ①適切な言葉探し　②語彙の分布や偏りを見ること　③使い分けを知るため

そして，シソーラスや類語辞典を体裁面から区別するための指標には次の三点が考えられる。

- A) 語釈や用例などがあるか。
B) 分類体系は品詞別であるか。
C) どのような語をどれくらいの数，収録対象にしているか。

このうち，今回とりあげたシソーラス，類語辞典は，A)に該当するか否かで，『分類語彙表』『日本語語彙体系』『日本語大シソーラス』と，それ以外のものと大きく区別される。このA)は目的③をもつかもたないか，ということに強く関わってくる。A)に該当しない『分類語彙

表』『日本語語彙体系』『日本語大シソーラス』の主な目的は①や②にあらう。一方、それ以外のA)に該当するものは目的③も強くもつと考えられる。「シソーラス」の簡単な定義は「語句を意味によって分類・配列したもの」であるが、この定義に該当するもののうち、目的①や②の強いものが「シソーラス」と呼ばれ、目的③の強いものは「類語辞典」と呼ばれて区別されていると言えるだろう³。さらに今回リストにあげた「類語辞典」と呼ばれるものの中では、目的③を強く打ち出し、収録語を限定しているという点において、『類語例解辞典』が他三つの類語辞典(『角川類語新辞典』、『類語大辞典』、『三省堂類語新辞典』)と大きく区別される。

3.2. 比較

3.2.1. 分類体系は品詞別であるか

具体的な差異をみるために、『分類語彙表』と、同じシソーラスである『日本語大シソーラス』とを主に比較し、加えて三つの類語辞典『角川類語新辞典』、『類語大辞典』、『三省堂類語新辞典』とも比較する。『分類語彙表』と『日本語大シソーラス』とは、先にあげた「B) 分類体系は品詞別であるか」で大きく区別される。『分類語彙表』はまず品詞で分類される。『日本語大シソーラス』は品詞の区別はされていない。ちなみに、シソーラスの先駆けと言われるロジェのシソーラス(Roget 1852)は、はじめに意味で分類され、下位で品詞分類が行われている。品詞別の分類体系をとるかとはないかは、シソーラスの設計において一つの大きな分かれ目であり、この品詞分類が望ましいかは利用目的によるであろう。『分類語彙表』は、同じ品詞どうしでの語の比較のしやすさや、品詞別の意味分布の見通しの良さを優先させ、先に品詞論的に分類されている。

3.2.2. 属性分類か主題分類か

池田(1993)は、「我々が個物を分類できるのは、我々の目からみて、重要な性質を選んでいるからなのである」と述べている。言葉をどう分類するかは、言葉のどの性質や観点に着目するかによる、と言えるだろう。『分類語彙表』や『日本語大シソーラス』をはじめ、『類語大辞典』以外の類語辞典は、主に「関係」「人間」「自然」を分類の出発点にし、その下に細かな分類を展開している。よって、どれも似たような体系を持つように思われるが、現実には、部分的に似たところがあっても、どれ一つ同じ体系にはなっていない。荻野(1993a)は「概念化のレベルも観点もさまざまな多くの語彙があるとき、どのように「共通概念」を括り出すのか」という問題提起を行っているが、この「共通概念」の括り出し方が多様であり得るために、体系に相違が生まれるのであろう。

木村(1993)は、『分類語彙表』と『角川類語新辞典』とを比較し、『角川類語新辞典』では「主題分類」が行われていると指摘し、具体例として、「病気」という主題に関わる語の分類の違いをあげている。『角川類語新辞典』では073「発病」という小分類の下にc「治療」という細目が含まれ、「発病」と「治療」とはまとめて分類されている。それに対し、『分類語彙表』では、「発病」は〈1.5 自然現象〉の下に、「治療」は〈1.3 人間活動〉の下に収められ、大分類からし

て別分類になっている、という例を示している。

木村(1993)に「主題分類」の定義はないが、主題分類とは、語が本来持っている事柄の性質に沿って分類することより、「ある主題のもとに関連する語を集めて分類することを優先する分類」と定義することができよう。それとは逆に、「語が本来もつ性質によって分類することを優先する分類」を、ここでは「属性分類」と言うことにする。

実は、『分類語彙表』と『角川類語新辞典』について言われたのと同じ指摘が、『分類語彙表』と『日本語大シソーラス』の間にも言えそうである。『分類語彙表』の一番の目的は「語彙の分布や偏りを見る」ことであり、そのために属性分類を採用している。その点が、「言葉探し」を一番の目的として主題分類を行っている『日本語大シソーラス』や類語辞典との分類の違いを生んでいると思われる。例えば、『日本語大シソーラス』では、「医者」は「医術」などと共に〈医学〉のところに、「易者」は「占術」などと共に〈当たり外れ〉に、それぞれ離れて分類されている。『類語大辞典』も同様に、〈治す〉と〈見込む〉とに分かれている。『類語大辞典』はそもそも用言の分類から主発しているため、もっとも主題分類が徹底していると言えそうである。一方、『分類語彙表』では「医者」も「易者」も同じく〈1.2410 専門的・技術的職業〉に分類されている。この二つ上の分類〈1.2 人間活動の主体〉という括りで語を眺めると、「人間」に関し、性別、年齢、親族、対人関係、社会的地位など、さまざまな場面でのどのような語が用いられるのか、一覧することが可能になっている。類語辞典のうち、『角川類語新辞典』や『三省堂類語新辞典』も職業に関する語は一つの括りになっており、「医者」と「易者」などはその括りの中で一覧できるようになっている。しかし、親族や代名詞に関する語は別分類になっており、『分類語彙表』ほど「人間」に関するすべての語が一覧できるというような体系にはなっていない。表現のバリエーションの一覧性の高さは『分類語彙表』が属性分類を行っていることによる特徴であろう。

さて、「言葉探し」の目的には主題分類になっている方が使いやすそうである。しかしながら、どのような主題分類がより「言葉探し」に適切であるかは、その時々で違ってくるものであろう。学校や教育という主題のもとでは直感的に近い関係にあると思われる「先生」「担任」「学生」を例に、これらがどのように分類されているかを調べた結果を表5に示す。『分類語彙表』では教える側と教わる側という違いによって、「先生」「担任」と「学生」とでは少し離れた分類になっているが、人物という属性が共通するのでそう大きくは離れていない。『三省堂類語新辞典』と『日本語シソーラス』では一つの主題のもとにまとめて分類されていた。『角川類語新辞典』は「担う」という観点の違いに主題の違いが認められ、「担任」が少しずれて分類されていた。もっとも主題分類に徹していると思われる『類語大辞典』は、教える側と教わる側という違いや、「担う」という役割の違い、すべてが主題の違いとされ、三者は全く別々に分類されていた。

このように、結局は、属性分類であろうと、主題分類であろうと、先に述べたとおり、言葉のどの性質や観点に着目するかによって分類、配列は異なるものである。「一覧」や「言葉探し」のためにどのような分類、配列が適切であるかはその時々によって違ってくるものであり、単純

に優劣を論じられるものではない。

表5 「先生」「担任」「学生」の分類比較

	先生	担任	学生
『分類語彙表』	<1.2410 専門的・技術的職業>		<1.2419 学徒>
『三省堂類語新辞典』	<J 3 職業>		
『日本語大シソーラス』	<0380 学事>		
『角川類語新辞典』	<572 教育者>	<552 担当者>	<572 教育者>
『類語大辞典』	<2102 教える>	<5307 になう>	<1806 学ぶ>

3.2.3. 科学的分類であるか

荻野(1993 a)は、科学的分類は日常の感覚とは相当に異なっていることを、魚、虫、野菜の例を用いて説明している。太田(1993)もまた、食べ物を対象に、「クジラはけものかさかなか」「トマトは野菜か果実か」などを例に、科学的な分類と文化的な分類とは違うことを説明している。言葉の分類が厳密な科学的な分類である必要はないのかもしれない。しかし、『分類語彙表』と『日本語大シソーラス』、その他類語辞典で、魚、虫、野菜、果物のいくつかを引き比べてみると、科学的分類をどれだけ行うかという方針はそれぞれで異なることが浮かび上がる。例えば、「メロン」「すいか」「いちご」は分類学上は野菜に分けられ、青果市場では果物として扱われているものである。これらを果物とは区別して、野菜や植物として扱っているのは『分類語彙表』、『角川類語新辞典』である。そして、果物として扱っているのは『日本語大シソーラス』、『類語大辞典』、『三省堂類語新辞典』である。『分類語彙表』や『角川類語新辞典』は、魚、虫、野菜、果物など、全般的に、ある程度科学的分類に即した分類を行っている。一方、『日本語大シソーラス』は、魚、虫、野菜、果物などはすべてアイウエオ順に並べ、細かな分類はしていない。それよりも網羅的に季語として用いられる際の季節を表示し、言葉の分類であるという態度を徹底させているようである。『類語大辞典』と『三省堂類語新辞典』も言葉の分類であることを優先しているように見える。ちなみに、『類語大辞典』で「野菜」は〈食べる〉に、「果物」は〈味わう〉に区別して分類されている。『三省堂類語新辞典』では「野菜」は〈植物〉に、「果物」は〈産物・製品〉の〈菓子〉の下位に区別して分類されている。それぞれ独特の分類観点を持ち込んでいるようである。

3.2.4. 人名はどう分類されるか

『分類語彙表』と『日本語大シソーラス』はどちらも人名が多く取り上げられている。これは、他の類語辞典には見られない面白い特徴である。『分類語彙表』では、人名をシソーラスで扱うとどのような分類があり得るかという試みとして〈1.2390 人名〉が設けられ、日本人に多いといわれている「佐藤 鈴木 田中」などをあげる段落01にはじまり、国内外の歴史上の著名人がいくつか分類され、最後は「浦島太郎 シンデレラ ピノキオ」など、物語上の人物をあげる段落

17の分類で締めくくられている。『日本語大シソーラス』では、「序」に「人名は人物典型を表現する際の最初の手掛かりになるものである」と明言してあるとおり、人名の扱いには積極的である。「シンデレラ」は〈架空人物〉、〈美女〉、〈なさぬ仲〉（継子関係）、〈いじめる〉など、「シンデレラ」が取り上げられ得るところで多重に分類されている。

4. シソーラス、類語辞典の今後の課題

最後に、『分類語彙表』を含め、シソーラスや類語辞典の将来像を探るべく、今後の課題を述べる。

(1) 語釈と用例の付与

語釈や用例がなく、語が列挙されているだけの方が一度に多くの語を視野に入れることが可能である。すでに類語辞典がいくつも存在し、また、国語辞典とうまく相互参照しさえすれば、語釈や用例は得ることができるため、『分類語彙表』そのものに語釈や用例の付与は必要はないのかもしれない。しかし、言葉の並びをみていると、意味や用例の助けがほしくなる場合が多いことは確かである。特に多義語の場合、どの意味で分類されているかが特定されることが望まれる。よって、『分類語彙表』には、今後、簡単な語釈の付与により多義性を明示することや、用例の付与により意味の特定を容易にすることを検討したいと考えている。

(2) 位相の明示

性別、年齢、職業などの社会集団の違いや、使用場面の違いに応じて、用いられる語に違いが現れる現象を「位相」と言う。語が列挙されているとき、それぞれの語の性格を把握するために、その語がもつ位相の明示は有用であろう。そのため、類語辞典ではすでに位相を明示する試みがある。以下は、各辞典が「位相」として付与している項目の一覧である。

『角川類語新辞典』	日常語、口語、文語、文章語、雅語、俗語、隠語、方言、 古風な表現、男性語、女性語、幼児語、天文・気象、 地理・地学、動物、植物、数学、物理・化学、医学、生理学、 哲学、心理学、仏教、キリスト教、法律、経済、軍事、 農林業、服飾、料理、美術、音楽
『類語大辞典』	文章語、雅語、俗語、卑語、幼児語・児童語、女性語、男性語
『三省堂類語新辞典』	文章、会話、古風、俗語

このように、辞典間には「位相」を示す項目に違いがみられる。また、辞典間で、実際に語にふられている位相情報を見比べると、一致しないことが少なくない。つまり、どのような語にどのような位相情報の付与が適切であるかという客観的な基準はまだない状況である。よって、まずはその基準を検討することから始めなければならない。

(3) 意味関係の明示

田中・仁科(1987)は、計算機でシソーラスを扱う立場から、『分類語彙表』などの「従来のシソーラスは、階層化されたものの相互が意味的にどのような関係にあるかが不明確で曖昧なことが多い。例えば階層化されたものの相互が上位／下位関係にあるのか、それとも部分／全体関係にあるのかがはっきりしない」と指摘し、それらが自然言語意味処理には不十分であり、階層関係を明確にしたシソーラスの作成が重要であると主張した。

人が使う場合は意味関係を推察することが可能であるため、『分類語彙表』など多くのシソーラス、類語辞典は意味関係が明示化されていない。『分類語彙表』で、例えば部分／全体関係のものをしてみると、「日本」と「東日本」は同一項目内の別段落にあるが、「東日本」と「東北」は同一段落にある。同じ段落に「西日本」や「奥羽」「奥州」「三陸」なども分類されており、どれとどれとが部分／全体関係にあるのか、確かに分かりにくい。

そのような問題を解決するために、意味関係を明示化しようとする試みがある。例えば、『現代日本語名詞シソーラス』(荻野 1993 b)では、上位／下位関係と、部分／全体関係とが区別して明示されている。

また、意味関係を明示した英語のシソーラスに WordNet がある (Miller, G.A. 1985)。これは、語と語の間、また、語義と語義との間にある様々な意味関係をポイントとしてネットワーク状に張り巡らしたものである。ここでは意味関係を詳細にとらえることが試みられている。上位／下位関係の下位にあたるものは「部分」「属性」「機能」に分けてとらえられ、また、部分／全体関係の部分にあたるものは、「一部」「要素」「材料」に分けてとらえられ、階層化されている。また、「同義」だけでなく、「反義」もあわせて扱われている。

(4) 視点の明示

長尾真編(1996)では、「語の分類をする際には語に対する視点の問題を考慮する必要がある。すなわち言葉には別の視点からみれば別の意味の側面に焦点があたるという性質がある。」という指摘がなされ、次の例が示されている。

道具という視点：	たわし、洗濯機 ほうき、掃除機
動力という視点：	たわし、ほうき 洗濯機、掃除機

つまり、シソーラスが固定されていると、別の視点による意味関係がとらえられないということである。そのため、シソーラスは、理想的には視点別に動的に生成できることが望ましいということになろう。そのようなシソーラスをめざすものとして、川村他(1994)の「語を種々の観点から分類した多次元シソーラス」がある。これは、ひとつの語に観点を複数与え、観点ごとに動

的にシソーラスを構築する方法を提案するものである。例えば、「鳥」と「飛行機」について、次のような記述が提案されている。

動物 = 生物 {動的属性：(動く), 静的属性：(性別), …}

鳥 = 動物 {動的属性：(動く (空中)), 利用・用途 (食物, ペット),
全体／部分 (翼, くちばし), …}

乗りもの = 人工物 {動的属性：(動く), 利用・用途 (移動), …}

飛行機 = 乗りもの {動的属性：(動く (空中)), 全体／部分 (翼), …}

『分類語彙表』など固定化された従来のシソーラスでは、「鳥」と「飛行機」は、それぞれ「生物」と「人工物」として分類されるため、離れてしまう。しかしながら、上記のように複数の観点によって記述してあれば、両者から「空中を動く」「翼を持つ」という共通点をとりだし、その観点でシソーラスを生成すれば、両者を近くに並べてとらえることが可能になる。

筆者も観点を付与するシソーラスの作成に参加した経験をもつ（情報処理振興事業協会 2001）。視点や観点の付与はたいへん面白く、語の分類・配列に有用であると思われたが、試作できたのはわずかに衣服や食べ物など、具体物を扱う 5 カテゴリーのみであった。このような作業を何百、何千とやることは現実問題としてかなり困難であるという印象がある。視点や観点を付与することの有効性は荻野(1993b)でも述べられているが、やはり実際に試されたのは数十項目と、その数は少ない。

以上、4つの課題を、実現しやすさの順に示した。(3)や、特に(4)の実現には、これまでの『分類語彙表』のような紙ベースの2次元の配置では限界がありそうである。これからのシソーラス、類語辞典は、計算機をうまく活用し、多次元での構築を視野に入れて検討していくことになる。

5. おわりに

「品詞別分類の有無」「属性分類か主題分類か」という大きな違いに加え、「科学的分類の有無」「人名分類の有無」といった違いとをあわせ、『分類語彙表』と他のシソーラスや類語辞典とを比較し、『分類語彙表』の特徴と位置付けとを明らかにした。『分類語彙表』は、品詞による4分類からはじめられ、4～5階層の単純な木構造になっている分類体系である。また、語が本来もつ性質によって分類することを優先する「属性分類」が行われ、科学的分類に準じ、人名分類の試みもあるものである。このような『分類語彙表』の特徴の第一は、語彙の分布や偏りを見るための「物差し」である、という点である。一方、多くのシソーラスや類語辞典は、言葉探しに便利であることを一番の目的にし、「主題分類」が行われ、分類・配列がさまざまに工夫されている。『分類語彙表』とその他のものとは第一の目的の違いによって線引きされるという違いが見ら

れた。

『分類語彙表』を含め、シソーラスや類語辞典としてより望ましい姿を模索すべき課題は多くある。適切な分類・配列というものは具体的な要求によって異なるという点を考慮しながら、さまざまにあり得る分類・配列の方法、可能性について今後十分な議論が望まれる。

注

- 1 <http://www.kokken.go.jp/katsudo/kanko/data/index.html> を参照。
- 2 形容詞・形容動詞の派生名詞は網羅的には収録されていない。例えば「長たらしさ」は、〈相の類〉で取り上げられた「長たらしい」の一種の活用形とみなされ、〈体の類〉には収録されていない。
- 3 アイウエオ順になっている類語辞典もある。これらは「シソーラス」の定義からは外れるが、目的が言葉探しにあるものもある。たとえば、『早引き類語連想辞典』(2001) (野元菊雄監修, 米谷春彦編集, ぎょうせい) は語釈や用例がなく、言葉探しという目的に絞られているようである。

参考文献

- 池田清彦(1993)「分類とは何か」『日本語学』12(5), 4-10, 明治書院
- N T T コミュニケーション科学研究所監修(1997)『日本語語彙体系』 岩波書店
- 太田泰弘(1993)「食べ物の分類」『日本語学』12(5), 58-64, 明治書院
- 大野晋・浜西正人(1981)『角川類語新辞典』 角川書店
- 荻野綱男(1993a)「シソーラスのための語彙の意味分類をめぐって―「焼き魚は魚か」―」『日本語学』12(5), 18-30, 明治書院
- 荻野綱男(1993b)『現代日本語名詞シソーラスから見た語彙の意味分類』平成4年度科研費補助金研究成果報告書
- 川村和美・片桐恭弘・宮崎正弘(1994)「語を種々の観点から分類した多次元シソーラス」『信学技報』NLC94(48), 33-40, 電子情報通信学会
- 木村睦子(1993)「意味分類体辞書の系譜」『日本語学』12(5), 31-39, 明治書院
- 国立国語研究所(1953)『婦人雑誌の用語―現代語の語彙調査』 秀英出版
- 国立国語研究所(1957)『総合雑誌の用語 前編―現代語の語彙調査』 秀英出版
- 国立国語研究所(1962)『現代雑誌九十種の用語用字 第1分冊―総記および語彙表』 秀英出版
- 国立国語研究所(1964)『国立国語研究所資料集 6 分類語彙表』 秀英出版
- 国立国語研究所(1970)『電子計算機による新聞の語彙調査』 秀英出版
- 国立国語研究所(1983)『高校教科書の語彙調査 I』 秀英出版
- 国立国語研究所(1986)『中学校教科書の語彙調査 I』 秀英出版
- 国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』 秀英出版
- 国立国語研究所(1994)『分類語彙表 フロッピー版』 秀英出版
- 国立国語研究所(1995)『テレビ放送の語彙調査 1 ―方法・標本一覧・分析』 秀英出版
- 柴田武・山田進編(2002)『類語大辞典』 講談社
- 小学館辞典編集部(2003)『類語例解辞典 新装版』 小学館
- 情報処理振興事業協会(2001)『IPAL (SURFACE/DEEP) の研究―新世代の辞書記述を目指して

一』 情報処理振興事業協会

田中穂積・仁科喜久子(1987)「上位／下位関係シソーラス IMIMAPI の作成 (I)」『情報技法』NL64 (4), 25-34

長尾真編(1996)『岩波講座ソフトウェア科学(15) 自然言語処理』 岩波書店

中野洋(1995)「分類語彙表の増補とその利用」『言語処理学会第1回年次大会発表論文集』, 141-144, 言語処理学会

中野洋(1996a)『「分類語彙表」形式による語彙分類表(増補版)第1分冊〈本表〉』 国立国語研究所

中野洋(1996b)『「分類語彙表」形式による語彙分類表(増補版)第2分冊〈索引〉』 国立国語研究所

中村明・芳賀綏・森田良行編(2005)『三省堂類語新辞典』 三省堂

宮島達夫・小沼悦(1994)「言語研究におけるシソーラスの利用」『語彙論研究』, 539-568, むぎ書房

山口翼編(2003)『日本語大シソーラス』 大修館書店

山崎誠(2004)『「分類語彙表—増補改訂版—」の分類の特徴について』『日本語文学』20, 73-86, 韓國日本語文學會

Miller, G.A.(1985)'Wordnet:A Dictionary Browser' in Information in Data, *Proceedings of the First Conference of the UW Centre for the New Oxford Dictionary*. Waterloo, Canada: University of Waterloo.

Peter Mark Roget(1852)*Roget's Thesaurus First edition*, Longman.

付 記

本稿は、2005年12月17日に、国立国語研究所にて開催された公開研究発表会「シソーラスの^{へんさん}編纂と活用」の予稿集に掲載したものを改稿したものである。

柏野 和佳子(かしの わかこ)

国立国語研究所 研究開発部門

190-8561 東京都立川市緑町3591-2

waka@kokken.go.jp